

## 患者さんとの触れ合い

これまで20数年にわたる臨床期間には、多くの患者さんとの触れ合いがあった。そのなかでも、心に残っている2人の患者さんを診察したのは、2年程前のことであった。

## 2005年10月〇日

昼休みに、Fさんから診療予約の電話が入る。子どもが通う保育園の縁で、以前から家族で来院してくれていた。40代前半、細いカラダにエネルギー満タンのハツラツママさんだ。出産して、まだ1年少ししか経っていないはずだ。2ヵ月前から口内炎の痛みが消えないという。

夕方、その日最後の患者さんとなったFさんの舌側縁をみて、ハッとした。明らかに、いままでみたアфтаとは大きさや辺縁の膨隆が異なり、嫌な感じだった。とりあえず、付近の咬合面やインレーに鋭縁部の有無を確認し、薬を塗布・投与して、次の来院を約束した。

Fさんが帰るとすぐ、口腔疾患の写真入りの本を調べながら、「まさか、そんなこと。彼女にかぎって……」という言葉が頭のなかを駆けめぐった。

## 10月△日

何日経っても、改善する気配はまったくみられず、口腔外科の先生へ電話で診察を依頼した。

心配げなFさんに、「安心のためだから、行って診てもらっ

てね」とさり気なく言い、紹介状を手渡した。

## 10月×日

紹介先の先生からの電話に、いつもより早く出たことを覚えている。「がんだね。間違いない。扁平上皮がんだよ」。一言一言が、ゆっくりと聞こえた。「まさか、だってFさんの下の子は1歳、上の子だってまだ小学生なのに、なぜ?」。それからすぐに、Fさんは入院することとなった。

## 2006年1月〇日

その数ヵ月後、もう1人の患者さん、A君が来院した。幼いころからの患者さんで、矯正治療もしていたので、定期的に来院していた。

お母様が「左の顎の下にコリコリ触れるものがあるって、内科の先生に、歯か歯肉のほうに異物がないか調べてもらうようにと言われました」とおっしゃった。左側上下に智歯が埋伏しており、圧痛もあったことから、「親知らずの炎症の可能性もありますよ」と説明した。

## 2月×日

1ヵ月後、診療時間前の朝、お母様が訪ねてきた。「先生、悪性リンパ腫だったんです」。私はまた凍りついた。自分が発した言葉の重みを感じつつ、治療のために休学すると話してくれたお母様に、「頑張ってください」と言うのがやっとだった。

A君の姉が来院した際に、お母様が毎日欠かさず手作りのお弁当を病院に届けていること、大学生の彼女自身も家業の手伝

いをしたりと、家族一丸となって戦っている様子を話してくれた。私は、ただ心から治療の成功を祈ることしかできなかった。

## 2007年1月△日

元気に仕事を再開したはずのFさんの急変を知ったのは、正月に届いた彼女からの手紙だった。すぐに病院へ見舞いに行くと、11月の七五三の記念写真を嬉しそうに見せてくれた。放射線治療で唾液腺がダメージを受け、流動食のみの状態であった。唾液代替薬品などを数種送ったが、どれも味が合わず結局は食事をとれなかった。

その月末、「お見舞いには来ないで」というメールが来た。数日後、彼女は子どもと母親に見守られて、この世を去った。

## 2007年11月〇日

その一方、A君は奇跡的に回復し、高校1年生として元気に通学している。この嬉しいサブライズにはまだ続きがある。

姉が医学部の学士入学を目指して、予備校通いの猛勉強をはじめたのである。明確な人生の目標が定まったのだろう。厳しい医師への道、まして学士入学は倍率10数倍の超難関である。

そして、すばらしいことに、彼女は今春、大学卒業と同時に医学部生の切符を手にする。



毎日出会うたくさんの方の患者さんから、ときに大きな勇気や感激、喜びをいただくことで、次の診療のバッテリー補充をさせてもらっているように思う。